

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎

2017年2月5日（日）

主 題：「ほんとうの安息を求める人へ」

—神前で正直に生きる—

テキスト：ヘブル人への手紙4章1から10節

はじめに

- ・現代は忙しさと不安の時代です。「忙しいですか？」という言葉は、日常に交わされます。大阪では、その返答として「ぼちぼち、でんな！」という答えがよく返ってきます。この「ぼちぼち、でんな！」という言葉は外国語に訳す時に、本当に苦勞する表現です。ぼちぼち忙しいのか、あるいは忙しくないのか、まったくわかりません。いわゆる日本語特有のグレーゾーンであります。皆さんは、どう思いますか？
- ・ところで忙しいという字は、「心が亡びる」と書きますね。
「忙しい、忙しい」と言いながら、亡びへの道を邁進しているかも知れません。そのような忙しい毎日を送りながらも、心が充実しているならば、何も問題はありません。しかし心のどこかに、不安（心配）があるとすれば問題です。
- ・今の時代、先が読めない時代です。それだけに不安や心配の材料は多くあります。人は、どこかで休みたいという気持ちがあります。そこで神は私たちのために、安息を用意してくださいました。単に1週間のうち1日を、安息日として用意して下さっただけではありません。
- ・神の御手の中で、憩うことができるように、礼拝を用意してくださいました。身体をやすめれば、肉体の疲れは一応回復します。しかし精神的な疲れまでは回復するわけではありません。と言いますのは、人間は神のかたちに似せて造られたからです。神のみもとへ帰るまでは、本当の休みを得ることはできないからです。
- ・このように考えてきますと、人間は神に造られた者であることがわかります。ですから、神の前に正直に生きることは重要です。
- ・さて、著者は1章、2章において、イエス・キリストは天使たちより、はるかに優っている方であると述べました。3章に入って、イスラエルの最高の指導者モーセよりも、優っているお方であることを記しました。そして4章に入り、神の安息に入る特権について述べています。その特権とは、ほんとうの安息に入ることです。そこで私たちは今日のテキストから、真の安息に入る幸いについて2点学びたいと思います。

大切なポイント

1. 神が与える安息

1) 創造のはじめの安息

- ・4:4 というのは、神は七日目について、ある個所で、「そして、神は、すべてのみわざを終えて七日目に休まれた。」と言われました。
- ・神は天地創造において、すべてのみわざを終えて7日目に休まりました。つまり「神の安息」は天地創造のはじめから、イスラエル人だけでなく、全人類のために用意されていたものでした。
- ・私たちがすでに学んだことは、イスラエルの民が荒野を旅していた姿は、私たちに教訓を残してくれたことです。約束の地へ入ることが目標で、そこまでの旅はその途中にすぎませんでした。私たちの信仰生活にも最終目標があります。それは天の御国です。そこに行けば、真の安息が与えられます。
- ・聖書は、「信じた私たちは安息にはいるのです。」(4:3)と教えています。著者は10節でこう言いました。
4:10 神の安息にはいった者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。
- ・「神の安息にはいった者」とは、キリスト・イエスを最後まで信じ通して、キリストの救いに入れられたクリスチャンです。著者は、この時まですでに召されたステパノ、キリストの弟ヤコブ、ヨハネの兄ヤコブ、ペテロ、パウロ、その他多くの聖徒たちのことを心に思い浮かべたことでしょう。
- ・確かに、天の御国へ入ることは、神を信じた人たちの特権です。天国のすばらしさを行った人でなければ、わかりません。しかしこの地上においても、天国の前味というべきものを体験することができます。主を信じる人の生活には、喜びと讃美と感謝があります。
- ・この幸いな人生は、前の不安や心配とは全く違います。かつては過去のものに捕えられ、欲の奴隷でもありました。ですから人の噂や運命の奴隷でもありました。何かに捕えられた生き方をしている時、人には自由も喜びもありません。
- ・しかしイエスを知り、それらのものから解放された時、本当の自由が与えられ、感謝と喜びと讃美が生まれてきます。それがクリスチャンです。

2) イスラエルの民

- ・イスラエルの民が荒野を40年間旅した時、彼らは繰り返し、繰り返し、神につぶやきました。そして神に逆らい、神の声を聞いても従いませんでした。しかし神は彼らを常に守り、導いてくださいました。申命記29章
29:5 私は、四十年の間、あなたがたに荒野を行かせたが、あなたがたが身に着けている着物はすり切れず、その足のくつもすり切れなかった。
- ・神の加護があつたにもかかわらず、イスラエルは何度もつぶやき、モーセに逆らい、神とモーセに信頼を寄せていませんでした。それで神を怒りを覚えられました。詩篇95篇
95:11 それゆえ、わたしは怒って誓った。「確かに彼らは、わたしの安息に、はいれない。」と。

- ・不信仰の結果、ヨシュアとカレブの2人を除いて、彼らは約束の地へ入ることができませんでした。なぜでしょうか？ 著者は次のように言いました。
4:2 ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。
- ・ここで教えられていることは、昔イスラエルの民が神のことば（福音）を聞いても、それを信仰によって受け止めようとしなかったことです。そのため。約束の地へ入ることができなかった教訓から、学びなさいということです。

3) 新約時代の聖徒

- ・皆さん。新約聖書時代の神の民である私たちにも、神の安息が提供されています。新約時代の神の民とは、ユダヤ人信者も異邦人信者も含みます。クリスチャンに約束された最終の安息は、ヨハネが記した新しい天と新しい地です。少し長いですが引用します。 **ヨハネ黙示録**
21:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。
21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。
21:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、
21:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」
- ・この「**新しい天と新しい地**」こそ、私たちが入るべき安息の地です。それは行いによるのではなく、信じるだけで受けられる「神の恵み」です。ですから、私たちには喜びがあり、讚美があり、感謝の心が生まれるのです。これが、神が与えてくださる安息（平安）です。

2. 神のみことばと安息

- ・新約時代の私たちは、このように神の御子イエス・キリストの救いについて啓示を受けました。そして旧約時代の人たちよりも、はるかに豊かな安息が約束されています。

1) 霊的安息

- ・霊的安息とは、7日目の安息を迎えること以上のものです。それは、信仰の成長によって得られる安息のことです。神の恵み、神の慰め、そして神の清めからくる安息のことです。イエスは次のように言われました。

ヨハネ福音書 14章

14:27 わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

主イエス・キリストは、十字架を目前に控えて弟子たちに平安の約束を与えられました。

- 平安（安息）は、私たちが自力で勝ち取るものではありません。神から与えられるものです。しかし、それを受け取るには、ある条件が必要となります。その条件とは、私たちが信仰を働かせて、神に従順に生きることです。信仰を働かせるならば、結果として平安（安息）が与えられます。
- それとは逆に。罪を犯しつづけるなら、平安（安息）はいつの間にか私たちから去って行きます。安息（平安）とは、忠実という条件を満たす神の民に与えられるものです。これが、聖書が教える倫理です。

2) 永遠の安息

- さらに幸いなことは、神が与えてくださる安息は、現世的であると同時に、これから先のこと（未来）も教えてくれることです。つまり、私たちが天の御国で経験する永遠の安息を指しているのです。それはイエス・キリストが再臨くださる時に、実現する安息です。
- 出エジプト時代のイスラエルの民は、不信仰のために、神が約束された平安に入ることができませんでした。彼らは私たちへの、反面教師となりました。神の安息に入る約束は、今も残っています。信仰によって、その約束を受け取る者は、必ず永遠の安息に入れられます。しかし不信仰になるならば、イスラエルの民のように、途中でつまづいてしまいます。私たちは聖書のことばを、信仰によって結びつけているでしょうか。

4:2 ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。

- それでは、聖書のことばを「信仰によって結びつける」とは、どういうことでしょうか。それは、「信仰に同意しなかった」という意味です。福音を聞いても真剣に受け取らず、価値のないものと思うことです。初代教会時代も、そのような人たちがいました。 **使徒の働き**

17:32 死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう。」と言った。

- 今の時代も残念ながら、このような人がいます。
みことばを信仰によって結びつけるとは、どういうことでしょうか。私は次の2点を覚えます。

①神の前に正直に生きること

- 神の前では、隠すことができるものは何ひとつありません。すべてのものは、神に見通されています。ですから、私たちは神の前で、自分がしたことを言い開きしなければなりません。
- もし神の前で、神の目をごまかせるとしたら、それはもう神から離れた考え方が始まっていると言えましょう。神の前では何ひとつ隠すことができなく、見通されている

るのですから、神の前に正直に生きることは重要です。つまり悪は悪、罪は罪として、神の前で清算していくことです。

- 神の前に正直に生きるとは、喜びだけでなく、悲しいこと、辛いこと、寂しいことを言い表すことです。詩篇を読んでください。彼らはその心の内を詩歌として、言い表しました。

②神への信頼

- 神への信頼とは、神への信仰のことです。そのような信仰には、畏敬の思いが伴います。信頼関係こそ、すべての始まりです。神は天と地と、万物をお造りくださり、そして私も造ってくださったお方です。そして私を罪から救い出してくださった救い主です。それを受け止めるのが信仰です。
- このことを本当に自覚するならば、当然神への態度がそのようになってきます。神はすべてを支配しておられる支配者であり、主権者であるという信仰が生まれます。そういう信仰から、驚くべき力を持つ信仰がでてきます。

- ところで、神への信仰は先ず、私たちの心から始まります。心から言葉へ、また姿勢、行動へと移っていきます。そう考えてきますと、外に現れる言葉や行動の前に、先ず心が問われていることがわかります。

いかがでしょうか？ 心は疲れていませんか。神の前に出ることの大きな祝福は、心癒されることです。

- 聖書は次のように記録しています。

群衆のだれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。大きな力がイエスから出て、すべての人をいやしたからである。ルカ6:19

- 毎日のデイボーション（静思の時）が、鍵を握ります。御子イエス・キリストを信じる私たちは、すでに神の子とされました。そして神の前で正直に生きるならば、そして罪を犯しても正直に告白するならば、赦しを求めるならば、神は無条件で赦してくださいます。なんという幸いではありませんか。私たちは、そのような神のことば（聖書）を、いいかげんに聞き流してはいけません。信仰をもって受け止めることが大切です。

ま と め

主 題：「ほんとうの安息を求める人へ」

—神前で正直に生きる—

- 私たちは今日、「ほんとうの安息を求める人へ」と題して、新しい天と新しい地に入る者としての特権を学びました。

いかがでしょうか？ 私たちは日々、何を求めて生きているのでしょうか。ほんとうの安息を、求めているのでしょうか？ 神の前で、正直に生きているのでしょうか？ 自問自答しようではありませんか。

- 大切なことは、次の点です。

4:2 ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。

・みことばを信仰によって結びつけるとは、どういうことでしょうか？

1. 神の前に正直に生きること

すべてを見通しておられる神の前に、自分を置くことです。

するとそこに心の癒しが始まります。慰め、力、勇気が与えられます。

2. 神への信仰を固く持つこと

神への信仰とは、神を信頼することです。全能の神への信頼は、励まし、慰め、讚美、そして驚くべき力を与えてくれます。

* God bless you!